
Shiki

アカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Shikiki

【Nコード】

N5005C

【作者名】

アカ

【あらすじ】

“魔物”がいる。“魔法”がある。少年は非日常的な世界に迷い込んだ。

第1話：迷走（前書き）

読んでいくうちにこれからの展開が安易に予想できるようなことがあるでしょうが、それはあえてツツコまずそのまま読み進めてくださると幸いです。

第1話：迷走

見たことない虫が、足元をうろついる。

見たことない鳥が、けたたましく鳴いている。

見たことない木々が、周りに広がっている。

そんな見たことないものがたくさん森で、平々凡々な少年は呆然と立ち尽くしていた。

「ここ、どこだろう……」

風の音が、少年の独り言をかき消した。

ついさっきまで、自分は都内のフリーマーケットの会場にいた。

本当についさっきまで、数秒前まではそこにいた。

自動車の教習所が会場だった。しかし今、周りには木、木、木ばかり。コンクリートなど一切ない。

それ以前に入っ子一人すらいない。

何故自分はここにいるんだろう。少年は改めて考えてみた。

少年は今日の行動を、一つ一つ振り返ってみることにした。そうすればきっと、何らかの原因や解決策を見つけることができるかもしれないからだ。

自分の名前はハルキ。

名字はない。何故なら孤児で、親がいないから。

今日までずっと、孤児達を引き取ったりする施設で育ってきた。

高校二年生で、十七歳。性別は男、雄、ジェントルメン。

趣味は携帯電話のカメラで写真や動画を撮ること。そして料理。嫌いなものは気持ち悪い虫。特にゴキブリやムカデといったものは生理的に受け付けない。

——自分自身のことは完璧だ！ ハルキは小さく頷いた。だが問題はここからだ。今日の行動を振り返らなければ。

今日ハルキは友人と出かけていて、偶然フリーマーケットの近くを通ったので、なんとなく立ち寄ってみることにした。

自動車の教習所が会場になっており、なかなかの広さを誇っていた。

インテリア、古着、CD、中古ゲーム——様々な店を見て回った。すると、いつの間にか友人とはぐれてしまい、ハルキは一人になっていた。

友達を捜す羽目になったのだが、せっかくだから他の店を見ながら捜すことにした。

ハルキは一件の雑貨屋を見つけた。

品物はどれもガラクタばかりで、とても売れるようなものは置いてなかった。

だが、その中に一つだけ目に留まった物があった。

言葉では表現できない、不思議なオーラを放つ鏡だった。

鏡が気になったハルキはそれを買うことにした。

百円という安い値段が決め手となった。

鏡を見ていると、不思議なことに心を奪われたかのように惹きつけられ、鏡の虜になった。

そして気が付いた時——既にこの森にいた。

これがついさっきまでの記憶である。その時間、わずか一、二分ほど前。

なにがなんだかサッパリである。

何故教習所から森の中へ？

他の人はどうした？

というか、ここはどこだ？

わからない。知るわけがない。

面倒だから、考えるの終了。

——瞬間、鳥の甲高い鳴き声が辺りに響き渡った。

ハルキは異様なほどに驚いて、ビクツと体を震わせた。

どのくらい驚いたかと言うと、家の前を通り過ぎようとしたら、その飼い犬にいきなり吠えられた時ぐらいに驚いた。あれは油断し切っている時だと、物凄く驚くから注意が必要だ。

ハルキは舌打ちをした。あの鳥を捕まえられるものなら、焼き鳥のねぎまにして食ってやりたいところだ。

先ほどまで静かだった森は、動物達の鳴き声で騒がしくなってきた。

動物達の合唱コンクールだあ、などと阿呆なことを考えてたが、そんな場合ではない。なんだか急に怖くなってきた。

携帯電話を取り出した。最近発売された、人気のある携帯電話。画質が良くて、綺麗な写真が撮影できる優れ物。

誰かに連絡を取り、助けを求めようとした……のだが、ハルキの動きが止まった。

『圏外』

その二文字が、ハルキの瞳に虚しく映し出された。ちょっとだけ泣きそうになった。

仕方なく連絡は諦めて、適当に歩いて脱出を試みることにした。

歩き始めてから一時間ほど経った。が、周りの景色は特に変わらず、外に出られる気配はまったくなかった。

「誰かいませんかー！ 助けてくださーい！」

心細くなつて叫んでみた。声は虚しく辺りに響き渡るだけだった。その時、遠くの草がガサガサと揺れた。

……もしかしたら人かもしれない。

ハルキは急いで音のした方向に近付いた。

「誰かいるのー？ いるなら返事をして！」

返事の代わりに音の主が飛び出した。

それは体長が二メートルほどもある、巨大なトカゲ……のような生き物だった。

突然現れた巨大生物を目の前にハルキは俯き、笑った。

——そんな馬鹿な、こんなに大きなトカゲが日本にいるわけがない。それともなにか、これがゴジラだとも言うのか？ それこそ馬鹿な。ゴジラはもっと大きくて、放射能を吐くんだぞ。

じゃあ、こいつは一体……？

もう一度顔を上げる。

巨大なトカゲは、大きな口を開けていた。

「いやああああッ！ 食われる！」

ハルキは叫びながら全速力で逃げ出した。

逃げているうちに遺跡のような所までやって来た。

建物が一つ、でかでかとそびえ立っている。

しかし入り口は扉で閉ざされているため、中に入ることはできないようだ。

ハルキの体力は限界に近い状態だった。

元々運動などめったにしないから、体力はまったくないのだ。特に持久走なんかは苦手中の苦手だ。

それなのにずっと走らされる羽目になり、体力的にも精神的にも疲れ果て、とうとうその場で立ち止まってしまった。

もう動くことはできず、膝を押さえ、肩で息をしながら巨大なトカゲを睨む。

「コンディションさえ良かったら……お前なんか一発で倒せたんだぞ！」

精一杯の強がり。勿論トカゲには効くわけがないのだが。

——ああ、俺はトカゲに食われて人生のエンディングを迎えるんだなあ。悲しい、悲しすぎる。やりたいこともたくさんあったのに、あれもしたかった、これもしたかった。

ハルキは覚悟を決めて目を閉じた。

——その時。

「……燃えてッ！」

目を開けると、どこからともなく炎の球体が飛んできてトカゲに直撃した。

トカゲは熱さに悶え苦しみ悲鳴をあげた。

「あんた大丈夫？」

見知らぬ女がやって来た。短い黒髪、少しつり目で気が強そうな印象。見た感じだと自分と同じくらいの年代のコだと思う。

さらにもう一人やって来た。今度は男。少し年上のお兄さんという感じ。

たくましい体つきをしていて、背中に斧を背負っている。

「まだ生きている。早く始末しないと」

男はトカゲの頭をめがけて勢いよく斧を振り下ろした。脳天が真つ二つに割れ、そこからどす黒い血が噴水のように吹き出した。

日常では考えられない光景を目の当たりにしたハルキは血の気が引いた。

だが、なにはともあれトカゲに食べられずに済んだみたいだ。ハルキは助けてくれた二人に礼を言った。

男のほうは

「気にすることはないよ」と優しく言ってくれたが、女の方は違ってハルキの頭の叩いた。

「まったく、あんた馬鹿じゃないの！　こんな凶暴な魔物がいる森を丸腰で歩くなんて、自殺行為みたいなものよ！」

……魔物？

聞き慣れない言葉にハルキは首を傾げた。いや、漫画やゲームでなら聞いたことはあるが。

「まあまあ、落ち着けよナツメ。とにかく無事で良かったじゃないか」

男は女ことナツメをなだめるように言った。

「俺はディラン、ディラン・ダーサだ。そっちは妹のナツメ。お前

は？」

男の方はディランというらしい。随分と横文字な名前だ。

それにこの二人は兄妹らしい。ハルキは二人の顔を見比べてみたが、あまり似てないと思った。

「俺はハルキ、名字はないよ。あの、ここは一体……？」

「ここは……まあ森だな。その遺跡は俺達にもよく分からない存在だけど、とりあえず見回りでたまに見に来ている」

「はあ……」

そういう曖昧なことを聞きたいのではないのだが。

「で、ハルキ……だったかな？ 丸腰でこの森を歩くのは危険だから、俺達と一緒に来ないか？ 近くに村があるんだ」

危険な森を一人で歩かなくて済むし、それに人がいる所まで案内してくれる。こんなに好都合なことを断る理由などあるわけがない。

ハルキはその好意に甘えることにした。

第2話：世界

「あんだ、何か武器は持ってないの？」

武器がないと、先ほどのように魔物に襲われた時にまた逃げないといけなくなる。身を守る物の一つでも持っておきたいのだが、生憎ハルキは何も持っていなかった。唯一持っているものといえば携帯電話か、もしくはフリーマーケットで買った鏡、あと財布。どれも武器として使えない。

「じゃあ魔法は使えるんでしょ？」

……魔法？ 真顔でそんな馬鹿馬鹿しいことを言われても困る。魔法なんてものこそ漫画やゲームの次元だ。そんなことを聞くなっておかしい。

しかしナツメは巨大トカゲに炎をぶつけていた。まさかあれが魔法だというのか？ 松明を投げつけていたのではないのか？

「あれは“炎”の属性の魔法よ。松明を投げたわけじゃないから」信じられない。とにかく魔法なんてものは信じられない。手品とかの“マジック”ではなく、本物の“マジック”だという。そんなもの信じられるわけがない。信じたくもないし、認めたくない。

一体この世界に何が起きたのか。

「兄貴、こいつ武器も持っていないし魔法も使えないんだって。それなのにこんな所にいるなんて怪しくない？」

「ああ、たしかにちよつと怪しいかも……」

——自分からしたら、あんたら兄妹の方が怪しいんですけどね、魔法とか魔物とか言っちゃってさ。頭大丈夫ですか？ そう言いたかった。

ディランは一振りの剣を取り出し、ハルキに手渡した。

「えっと……これはレプリカの剣？」

「レプリカじゃなくて本物、ステンレス製の広刃剣だ。要するにブロードソード。そのわりにはあまり幅は広くないけど、まあ少し昔

の物だから気にしないでくれ」

今度は剣か。ついたため息が出てしまう。

「で、これ切れるの？」

「そんなの当たり前だろう。……と言っても、これは中途半端な切れ味だけだな。お前が怪しい奴にしろ、悪い奴には見えないから、とりあえず護身用。しばらくはそれを持っててくれ。あまり重くないから、お前みたいな非力そうな奴でも扱えると思うよ」

なんでもいいが、剣は銃刀法違反だと思う。

しかし巨大トカゲのような生き物がたくさんいるなら、武器の一つや二つは持つておくべきかもしれないと思い、ありがたく頂いておいた。

しばらく三人で歩いていると、魔物らしき生き物が現れた。巨大な芋虫で、蛇のように体をくねらせていて気色悪い。

ハルキはそういった虫が大嫌いで、見ることにすら嫌だった。

しかしナツメとデイランが手際良く退治してくれた。芋虫は体を風船のようにしぼませ、動かなくなった。

「大きい虫……見ていただけで気持ち悪いなあ。犬よりデカインじゃない？」

「まあ、魔物だしね」

やっぱりこの虫も魔物だと言うのか。どうしてしまったんだ、この世界は。

陽が暮れてきた頃、デイランは適当な場所に荷物を置いた。

「今日はここで野宿だ」

耳を澄ますと“魔物”とやらの遠吠えが聞こえた。もし寝ている時に“魔物”が襲ってきたらどうするつもりなんだろうか。

ナツメは焚き火の火を起こしていた。“炎”の魔法を使って薪を燃やすだけという簡単作業だ。人間チャッカマンだな、と思った。

「あんたさ、一体どこから来たわけ？ わたし達の村じゃ見たこと

ないし」

不意にナツメが聞いてきた。

「東京だよ」

ハルキはさも当然かのように答えたが、ナツメは首を傾げた。

「トーキョー……聞いたことない地名ね。どの辺りにあるの？」

「どこもなにも、日本の首都だよ。こんなの常識でしょうに」

「はあ？ ……兄貴はトーキョーとかニッポンって聞いたことある？」

デイルンは首を横に振った。

「兄貴も知らないみたいね。シキにそんな所はないんじゃないの？」

「シキってなに？」

「はい？ シキこの世界、この星のことでしょうが。あんたこそ、こんな常識以前のことにすら知らないの？ まさか記憶喪失……とか、そういうオチじゃないでしょうね」

地球じゃない……？ ということは自分は別の惑星にやって来た……ということなのか？

しかしフリーマーケットの会場からどうやって宇宙に行ったというんだ。宇宙服は着てないし、宇宙船にすら乗ってないし……。

考えれば考えるほど頭が痛くなってきた。ハルキは物事を深く考えるのは苦手だ。

わからない、意味不明だ。

ギブアップ。

「ごめん、俺はもう寝るよ……」

それでもハルキは体を横にしながら考えた。

地球じゃなくてシキというまったく別の世界に来てしまったらしい。

はっきり言って信じられないし、信じたくないし、信じるというのが無理だ。

こんな危ない所にいたくない。早く帰りたい。友達や孤児達はどうしているだろうか。

自分はここから無事に帰ることができるのだろうか。とても不安だ。

だがよくよく考えたら、このシキという所にいる間は学校に行けなくなる、ということになる。それは楽だ。ちよつと得した気分になった。

いや、それどころか帰った時に異世界があると発表すれば、ノーベル賞だか何かの賞が貰え、多額のお金が入り、さらには歴史の教科書に名前が載るほどの人物になれるかもしれない。

それってすごくない？　しょうもないことなのだが、それでもなんだか元気が湧いてきた。

ハルキは独自のポジティブ精神でこの日乗り越えた。

翌朝、ハルキはナツメに蹴られて起きた。実に痛々しい朝だ。

「起きたならさっさと支度して。置いていくわよ」

「もう行くの？　っていうか朝ご飯は？」

「とつくに食べたわよバカ。あんた、いくら起こそうとしても頑なに眠り続けるんだもん。だからやむを得ず蹴っ飛ばしたわ」

酷い。知り合ってから一日しか経っていないというのに、蹴っ飛ばすなんて酷すぎる。せいぜい頬を軽く叩く程度に抑えてほしいものだ。

「せめて朝ご飯ぐらい食べさせてよ」

「寝坊助がうるさい」

「にゅっ！」

ナツメの軽くないビンタが頬に炸裂した。

鬼だ。出会ってから一日しか経っていないというのに、この仕打ちなんなんだ。

ハルキはナツメの体からタチの悪いオーラが流れ出ているを感じた。

「ほらほら、二人して遊んでいるんじゃない。そろそろ出発するぞ」
ディランは野宿の後始末をしながら二人に呼びかけた。

「えっと、ちょっと聞いていいかなディランさん」

「なんだハルキ？」

「村に着くまで、あとの位時間がかかるの？」

「今日の夕方か夜かな」

「えーッ、まだ歩くの？」

ハルキは地面に倒れた。

「ちょっと、また寝ないでよ。燃やすわよ」

ナツメは魔法とやらで炎をちらつかせ、無理矢理ハルキを起こした。少し前髪がちぢれた。

悪魔だ、この人は人間という皮を被った悪魔だ……。

第3話：初戦

ハルキは心配だった。

「このシキつて世界には、美味しい食べ物はあるの？」
食事に関して。

「ラーメンはある？ 肉じゃがは？ お蕎麦は？」

「そんなもの聞いたことないな」

「うわぁん、なんてこつたい」

ハルキは地面に膝を着けて落ち込んだ。

「神様、ボクはあなたを恨みますよ！ ラーメンも肉じゃがもお蕎麦もない世界なんて滅びてしまえ！ っていうかそんなの自分で料理すればいいんだけどね！」

ハルキは料理が得意だ。

ハルキが暮らしていた施設には、孤児がたくさんいた。

大半は小学生かそうでないかの年齢で、自分は年上のお兄さんとしてその子達に料理を作ってあげていた。そうしているうちに料理の腕が上がっていたのだった。

とその時、草の中から一匹の魔物が飛び出してきた。

張りと弾力性のありそうな体質で、ゼリーのように体が透き通っていてボールのような丸い形をしている。いわゆるスライムと呼ばれそうな魔物だった。

ナツメとディランは既に構えた。

「兄貴、わたしがあいつを攪乱するから、その隙にキメちゃって」

「わかった、頼むぞナツメ」

「んじゃ、二人ともファイトー」

二人はハルキの気の抜けた声に反応した。

ハルキはいつの間にか遥か遠くにある木の後ろに隠れ、こちらの様子を伺っていた。そして手を振りながら

「俺は二人を精一杯応援するよ。だから負けないで、ファイトいつ

ばつだ！」と声をあげる。

しかしナツメは問答無用でハルキを引つ張り出した。

「せっかく剣を貸してあげたんだから、あんたも少しは戦いなさいよ」

「いや、だって魔物って怖いじゃん。怪我したら痛いじゃん。そして俺は一般人だから弱いよ」

「グチグチうるさいわね。戦いなさいって言うてるでしょうが」

ハルキはナツメに突き飛ばされ、魔物の目の前に来てしまった。魔物と目が合う。とりあえず愛想笑いをし、数歩下がった。

「こ、怖いです！ ナツメ様、助けてください！」

「それぐらい自分で倒しなさいよ馬鹿。ぶっ飛ばすわよ」

「訂正します、あなたの方が怖いです！」

「……燃やすわよ？」

「ごめんなさいッ！」

ナツメの殺気を感じたハルキは渋々と剣を取り出した。剣なんか持ったことすらないため、適当に構えてみる。

……ふむ、なかなかキマっているんじゃないか？

心の中は謎の優越感に満たされた。

「うわ、素人の構えよ」

しかし二秒でその気持ちを粉々にされた。

突然魔物が体当たりをしてきた。張りのある弾力性に優れた体はハルキを突き飛ばし地面に転ばせた。

「ば、バスケツトボールを投げ当てられた気分だ！ 助けてくださいお願いしますデイルン様！」

今度はデイルンに助けを求めたが、デイルンは首を横に振った。

「そいつはあまり強くないから、お前一人でも勝てる筈」

「あんまりだよ！ バスケツトボールってわりと痛いんだよ！ 凶器になりかねないんだぞー！」

ハルキが文句を言っている間に魔物は接近していた。

ハルキは体勢を素早く立て直し、右手に剣を持った。

「くえつ、俺の一撃を——！」

持てる力の全てを剣に込め、一步踏み出した。

「ぎゃふん」

しかし再び体当たりをくらった。

「カツコつけたのにダサい結果に終わったわね」

ナツメの一言が胸に突き刺さる。

「もういや……お願いだから助けて……」

「へたれてるんじゃないわよ」

ナツメの二言目は胸を深くえぐる。

「それならせめて助言をください……」

「弱いけど頑張つて、弱いけど」

やたらと弱いを強調され、心到大砲を撃たれたような感じになった。

「とにかく頑張れハルキ」

頑張れ。

ディランの“頑張れ”は嫌味も何もない一言だった。

あなたのお言葉は冬に入る露天風呂だ。暖かくて体全体に染み渡る。そう思った。

ハルキは今一度やる気を出し、剣のグリップを強く握り締めた。

「今度こそいくぜー！」

ハルキは足元の砂を蹴り上げた。砂は魔物の目に入り、魔物はジタバタと暴れた。

魔物が隙だらけになったところでハルキは跳んだ。

そして相手の体をめがけて剣を一気に振り下ろす。

魔物の体は真つ二つに切り裂かれ、そのまま動かなくなった。

ハルキは魔物を倒したことを確認すると、嬉しさのあまり子供のようにぴよぴよんと飛び跳ねながら喜んだ。

「見た見た？ 今の俺の華麗な一撃を！ 蝶のように舞い、蜂のように刺しちゃったよ！」

「はいはい、よかったわね」

「じゃ、行こうか」

しかし軽く流されてしまった。

「ちょ……ちょっと二人共！ もっとこうさ……『やったねハルキ、見直したよ！ スッゴクカッコ良かった！』っていうようなお褒めの言葉はないの？」

「ないわね」

「そんな！ じゃあせめて初めて魔物を倒した記念に何かくれるとかさあ」

「まったく……わかったわよ。その剣をあなたにあげるからあまり騒がないでちょうだい、他の魔物が来るかもしれないから。いいでしょ兄貴？」

「ああ、別に構わないけど」

「えへー、ありがとう二人共！」

ハルキはステンレス製の剣を貰った。

第4話：宿泊

昼過ぎ、木々の隙間から眩しい光が差し込む。

どうやらついに森の出口に着いたようだ。

ハルキが森から出ると、そこには広大な草原が広がっていた。

「この辺りまで来れば、あまり魔物は出ないだろうから安心しろ」

「ねえデイルンさん、村はどこ？ まだ着かないの？」

「ああ、全然まだだ。もう少し頑張れ」

ハルキは肩を落としてつつも頑張って歩き出した。

そして気付けば陽が沈みかけていた。

今日は朝から休みなしでずっと歩いてきた。体力のないハルキは既に疲れ切っていた。

「あの、まだ村に着かないの？ ボクの体は疲労によりクタクタ状態なんですけど……」

「うるさいわね。もうすぐ着くから頑張って歩きなさいよ」

「もうすぐ？ もうすぐってどれぐらいの時間？」

「ああもう、本当にうるさい。一時間ぐらいじゃないの？」

「一時間かあ。でもそれぐらいで着くって言うなら俺は頑張るよ。精神力回復！ モチベーションも最高潮に達する！」

ハルキはノリノリで流行りの歌を口ずさみながら歩き出した。

一時間後、ようやく村が見えてきた。ハルキは

「やっと休める！」と喜びながら村に向かって駆け出した。

村には木造建築の民家がに並び、あちこちに畑があった。

暗くなってきたため遊んでいた子供達は家に帰り、畑仕事をしていた大人も晩飯を食べるために仕事を切り上げた。

「なんか田舎って感じたね」

ハルキがそう言うと

「田舎で悪かったわね」と怒りっぽい口調でナツメが答えた。

「いやいや全然悪くないよ。むしろ俺、田舎って結構好きなんだ。なんていうかさ……ナチュラル！ って感じがしてさ、空気も美味しいし、ほのぼのしてるし。色々挙げていったらキリがないけど」
「あつそ。あんたが田舎好きなんてことは別にどうだっていいのよ。じゃあ、さようなら」

ナツメとデイランはハルキを置いて立ち去ろうとした。

しかしハルキは慌てて二人を引き止めた。

「なんでここで別れなきゃいけないんだよ」

ハルキはデイランの腕にしがみつき、涙ながらに訴えた。

「いや、そんなこと言われてもなあ……。村まで案内したんだから、あとは宿に泊まるなり何なり、お前の好きなように行動するといいたろ」

しかしハルキはお金なんか持っていないため、宿に泊まることはできない。それどころか水を買うことすらできない。ここで一人になつたら、お腹を空かせながら野宿をするしかない。

そんなの嫌だ。雑魚寝でもいい、一人で外に寝たくない。

だからハルキは二人の家に泊めてくれと頼み込んだ。

ナツメとデイランは完全に困ってしまい、小声で話し合った。ハルキはOKが出ることを祈った。

「ダメ」

現実は一蹴しかつた。

ナツメが言い放った

「ダメ」の一言で、谷底に突き落とされたような気持ちになった。自分は獅子の子じゃないから、崖から這い上がることもなんてできない。落とされたらぺっちゃんこになって終わりだ。

二人は再度別れの言葉を告げて立ち去ろうとするが、ハルキも再びデイランの腕にしがみついた。

ここで諦めたら本当に終わりだ。こうなったら獅子の子に負けんばかりの勢いで崖を登ってやる。

そんな闘志を感じるほどに、ハルキの目はギラギラと光っていた。
「共に長い一夜を過ごした仲じゃないか。忘れたの？ あの夜、俺達三人は果物ナイフでも切れない深い絆を得て——」

「えらく中途半端な絆だな……」

「いや、今は絆のレベルなんてどうだっていい！ 困っている人間がいるっていうのに、それをキミ達は見捨てるというのか？ か弱きボクを、魔物という危険な生き物がいる外に捨てていくっていうのか？ そんなのって……そんなのってあんまりじゃないかーっ！」
ハルキのわざとらしい抗議に二人はうんざりした。いい加減構うのが嫌になってきた。

早くハルキを置いて帰りたいが、いまだにディランの腕を掴んでいるから、この場から離れることができない。スッポンのごときにつきさ。

ディランはやれやれとため息をつき、

「まったく、仕方ないな……」と観念した。

「ちょ、ちよつと兄貴！ わたしはこいつを泊めたくないんだけど……！」

「正直言つて俺もあまり泊めたくないんだけど、ハルキだつて困っているんだから、一日泊めるぐらいなら構わないだろう？」

なんだか散々な言われようで落ち込むが、頼れる人が他にいない以上こうするしかなかった。

「ほら、俺達の家に来て行ってやるから来いよ」

ハルキは嫌々案内してくれる二人に感謝しながら、後を付いていた。

第5話：事件

ナツメとデイルンに案内されて、村の中で一番大きな家までやってきた。どうやらここが二人の家らしい。

実は二人はお金持ちなのかな、と考えたが、失礼なことにとても金持ちのような顔には見えないので、そうではないなと思った。

「ただいま」

「お邪魔します……」

ナツメとデイルンに続き、ハルキも家にあがった。奥から一人の中年男性が現れた。

髪の毛は一本も生えておらず、口元に紳士的な髭を生やしている。少々筋肉質な体つきをしているところを見ると、何か武術をたしなんでいるんだろうと予想できた。

「おかえりデイルン、ナツメ。遺跡の様子はどうだった？」

「遺跡は問題なかったけれど、それとはまた別に問題が……」

デイルンはハルキを引っ張り出した。

ハルキは軽く会釈をしておいた。

「この少年は？」

「遺跡で魔物に襲われていたのを助けたんだけど、自分は別の世界から来たと言っているんだ」

「別の世界……」

男はハルキをじつと見ると、少し顔をしかめた。

——もしかして、そんなに俺を家に入れたくないのかな？ とハルキは心配だったが、男はすぐに優しい表情を見せた。

「君、名前は？」

「は、ハルキですけれども……」

「ハルキ君か。とりあえず今日はウチに泊まっていくといい」

そして家の中を案内され、リビングらしき所に連れて来られた。

それなりの広さの部屋に丸いテーブルが置いてあり、床には良さ

そんな素材で作られた絨毯、その他家具やインテリアがもろもろ。

ハルキは男に座るように言われて、適当な椅子に腰掛けた。

「私はソンチヨ・ダーサ。このパーサ村の村長です」

ハルキはネーミングに驚愕した。

——ダジャレじゃないか。

「ハルキ君、君はその……別の世界から来たと、そう言うのかい？」

「多分別の世界からだと思うけど……、ほら、やっぱり自分自身でも信じられないし、でもナツメとディランさんは俺の住んでいた場所なんか知らないって言うし、魔物はいたりしてもう大変な感じだし……」

改めて説明しようとする何故か頭がこんがらがって言葉がおかしくなった。

ソンチヨにも東京や日本のことを知っているか聞いてみたが、やはり何も知らなかった。

その時、ハルキの腹が鳴った。

「この話はまた後でしようか。今ナツメとディランにご飯を作らせるから、少し待つといい」

「ところであの二人って……？」

「ああ、私の子供だ。妻は既に亡くなっていて、今は私達三人で暮らしている。君の家族は？」

「俺、孤児だから親も兄弟も知らないよ」

「それは悪いことを聞いたな……」

「いいよ、他の孤児達が家族みたいなものだから寂しくなかったし、ふと見ると、ディランとナツメが二人で調理している光景が見えた。

ディランは器用に包丁を扱っているが、ナツメのほうは卵割りに苦戦しているみたいで、さっきから白身が辺りに飛び散っている。

「……ウチのナツメは少々不器用な子でして。いや、料理の味自体は普通だから問題ないハズだけど」

「ソンチヨさん、今卵の殻を取り除くのが面倒だからって、そのま

んま混ぜ込んだっばいけど……」

「……うむ」

「見なかったことにします……」

料理が運ばれてきた。意外なことに見た目はまともだった。おそらくデイランの功績だろう。

しかし玉子焼きを口にした時、砂を噛み砕くような不快感を得た。

「ハルキ君、明日ニルクという町に行きなさい」

ソンチヨが玉子焼きを口に含みながら言った。

「ニルクには私の知り合いで、色々と物知りな方がいるか——いるから、その人に会いに行くといい。きつといい知恵を貸してくれる」
ソンチヨは話している途中で玉子焼きを吐いた。理由は言うまでもないが。

「ニルクまではデイランとナツメ、お前達が案内をしてあげなさい」

「ええー」

明らかに嫌そうな声をあげたのはナツメだった。

「わたし達がいなくなったら遺跡の見回りはどうするのよ？」

「別にたまに見回りをするだけで大丈夫だから、安心して行つていい」

そういえば、その遺跡とやらは何のために存在するのだろうか。

デイランとナツメも知らなかったが、もしかしたらソンチヨ村長なら何か知っているかもしれない。

ハルキは早速聞いてみたが、ソンチヨ村長もよく知らないらしく、古代に建てられた遺跡であること、そして今日までダーサー族が遺跡を護り続けてきたことぐらいしかわからず、遺跡の存在する意味はさっぱりだった。

——その時、外から悲鳴が聞こえた。一人ではなく、大勢の悲鳴が。

ソンチヨ達は顔を見合わせ、すぐに現場へ向かうことにした。
ハルキも行こうとしたが、ソンチヨに止められた。

「君は待つてなさい。何があるかわからない」

「でも——」

「魔物かもしれない。君が来ても危ないだけだ」

「じゃあ待たせていただくね。玉子焼きは残しておくから」

「いや、遠慮せずに食べているといい」

ソンチヨとディラン、そしてナツメの三人は驚愕した。

悲鳴がした所——村の入り口へ行くと、血まみれになった村人と、魔物の大群がいた。

薄汚れたような緑色の体、全身を覆う鱗。鞭のようにしなる尾、背丈は並みの成人男性ほどの大きさ。右手に鋭利な剣、左手には円形の盾。そして顔が……トカゲだった。

「リザードマン……！」数十頭はいるであろうリザードマンを見て、ナツメは舌打ちをした。

リザードマン達の目の前に一人の見知らぬ男が立っていた。褐色の肌をしていて、やたらと目立つ派手な黄金の鎧を着ている。そして……耳が長い。

この世界にはエルフが存在していた。この世界のエルフは、人間より寿命が遥かに長く、知性的で、色白であり、美形が多く、そしてやたらと妄想する種族だった。

しかしこのエルフは褐色の肌をしている。このようなエルフを、人々はダークエルフと呼んで区別した。

派手な鎧を着たダークエルフの男は、刃だけで二メートルはあるう長い剣をかざした。刃先には赤い液体が付着していた。

「お前、なんで村の人を傷付けた！」

ディランが叫んだ。

「俺達の姿を見るなり、うるさく叫んでうるさかったから、剣で刺してみただけだ。大人しくしてりや何もなかったのに。それでちよいと聞きたいことがあるんだが、これ以上怪我人を出したくないなら正直に答えろ」

三人は黙って頷いた。

「鏡を……知らないか？」

「鏡？ 鏡なんてたくさんあるが……」

ソンチヨは大切な村人を傷付けられて大人しくしていたくなかった。しかし、このダークエルフに逆らうことができなかった。雰囲気に分かる。格好は派手で変だが、相当な実力を持っている、ということが。鏡なんかで事が丸く収まるなら、ソンチヨとしてはありがたかった。

しかしダークエルフは首を横に振った。

「ただの鏡じゃない。聞いた話によると、別世界に行くことができる不思議な鏡らしい」

「別の世界……？」

「鏡の名前は、たしか……精霊の鏡、だったかな。何か知らないか？」

第6話：鏡

“別の世界”という言葉聞いた三人は真っ先にハルキのことを思い浮かべていた。

まだ信用はしていないが、ハルキが本当に別世界の人間だとしたら、その精霊の鏡とやらの力でこの世界——シキにやって来たのかもしれない。

「……もしかしたら、ハルキが鏡を持っているかも」

ナツメがソンチヨに耳打ちした。

その時、派手な鎧を着たダークエルフの長い耳がぴくりと動いた。「俺の耳は長いだけじゃなく、聴力が並みの野郎より良いんだ」にやりと不気味に笑った。

「いけ、リザードマン達！ ハルキって奴を探して真実を確かめろ！ それ以外の奴らは殺しても構わない！」

ダークエルフの掛け声と共にリザードマン達は村中に散った。途端にあちこちから悲鳴があがった。

「貴様……ッ！」

ソンチヨは素早い動きでダークエルフの懷に潜り込み、勢いよく顔面に拳を入れた。ダークエルフは鼻血を噴き出しながら地面に倒れた。

「ハゲ、中年のくせになかなかの一撃だな」

「ハゲではなく剃っているのだ。せめてスキンヘッドと言ってもらおうか」

「結局はハゲじゃねえか、ハゲ」

ダークエルフは長剣を支えに立ち上がった。

「ハゲ、お前の名前は？」

「このパーサ村の村長、ソンチヨだ。貴様は？」

「俺はハデーンだ」

「は、ハデーンだと……！」

——ダジャレじゃないか……ッ！

一方ハルキはのんびりとご飯を食べていた。玉子焼きには一切触れてなかった。

本当なら孤児達のために料理を作り、みんなで仲良く食卓を囲み、楽しく笑っている時間だ。

しかし異世界に来てしまったようなので、そのようなことはできない。

——このまま帰れなかったら、自分はこの世界にいるしかないのだろうか？ いや、何か帰る方法はある筈、きっとあるさ。

そして思い出したのが、フリーマーケットで買った鏡の存在だった。普通の鏡なのに、不思議と目を奪われる謎の鏡。

日本にいた時の最後の記憶は、この鏡を見つめていたところで途切れている。ということは、この鏡のせいで異世界に来てしまったのではないかと考えるのが自然だ。

しかし地球という環境で育った以上、ワープしたという非日常的な事を信じるのは非常に難しい。そう、それは利き腕ではない腕で針に糸を通すぐらい難しいのだ。もしくは超上級者向けのナンプレ並みに難しいのだ。とにかく簡単には信じられないのだ。

だがハルキは実際に見てしまった。自分に襲いかかってきた“魔物”を、ナツメが放った“魔法”を。

——そして、部屋の壁に貼ってある地図を。

明らかにこれは、地球の地形ではない。まったく違う形だ。

「夢じゃ……ないんだよね」

その問いかけに答えるかのように家の扉が開け放たれた。

荒々しい鼻息を吹かしながら、剣と盾を持ったトカゲが目の前に現れた。

——夢じゃ……ない、よね？

ハルキは咄嗟に立ち上がり、部屋の隅へ逃げた。よくわからないが、とてつもなく危険な状況だということはわかった。

光輝く剣の刃を見て、あれなら鮪も簡単に真っ二つにできるかもしれない、と考えてみた。つまり自分も簡単に真っ二つにされるかもしれない。

再確認をする。やっぱりとてもなく危険な状況だ。

ハルキはディランから貰ったステンレス製の剣を取り出した。

——大丈夫、俺ならやれる、勝てる筈。この前だつて一人で魔物をやっつけたじゃないか。だからこの剣を持っているんじゃないか。しかし目の前の鋭利な刃物を見ると、その覚悟は簡単に失われた。——やっぱり無理だよ。刺さったら痛いし、血が出るし、入院しなくちゃいけない。

なにより……怖い。

すると、その時だつた。リザードマンの体が宙に浮かび上がり、床に叩きつけられた。

一瞬何が起きたかわからなかったが、そこにはナツメがいた。彼女がリザードマンを投げたようだ。

「ハルキ、さっさと逃げなさい！」

「あ、えっ、このトカゲの魔物はなんでこんな所に……？」

「そんなのわたしが知るわけないでしょ！」

ハルキは自分の口から“魔物”という言葉が自然に出てきたということに気付かなかった。

「それより聞きたいことがあるんだけど、あんた鏡って持ってるの？」

「へ？ うん……なんで知ってるの？」

「やっぱり……。いや、でもそれが精霊の鏡かどうかはまだわからないし……」

リザードマンが起き上がろうとした。しかしナツメがすかさず顔を踏みつけて動きを封じた。ついでに二、三回蹴りを入れておいた。とても容赦なかった。

「今ダークエルフが精霊の鏡っていう物を求めてこの村に来ているの。精霊の鏡は別世界に行ける不思議な鏡らしいんだけど、あんた

が本当にこの世界の人間じゃないのなら、その精霊の鏡とやらの力でこの世界に来たんでしょね」

「そうかもしれないよね」

「その鏡、ダークエルフに渡すことってできない？ このままだと関係ない村人が殺され続けるのよ」

ハルキは悩んだ。

おそらく自分のせいで村人達まで巻き込んでしまつて、とてもじゃないけど渡すのは嫌と言えない。

だが鏡を渡してしまったら、元の世界に帰れなくなってしまうのではないか？ 唯一の手がかり（と言ってもまだよくわからないけれど）がなくなってしまうと、本当にどうしようもなくなってしまうそつだ。

村人の命を取るか、手がかりを取るか。

こんなの、急には決められない。

「ああ、もう、行くわよ！」

ナツメはリザードマンにトドメを刺し、ハルキの腕を引っ張つた。「行くつて、どこに？」

「ダークエルフの所。鏡を渡して、この村から手を引いてもらう！」

「ちよつ……それは困るよ！ 帰れなくなるかもしれないじゃないか！」

「あんた、他人の命は大切じゃないの？」

それはもちろん大切だ。当たり前だ。

しかし元の世界に帰ることも大切だ。異世界で一生を過ごすなんて、絶対に嫌だから。

二つを天秤にかけてもどちらにも傾かず、シーソーのようにゆらゆらと揺れるだけだつた。

ナツメはため息をつき、無理矢理にでも連れて行こうとハルキを引っ張つた。

「だからー！ 俺は他人の命も大事だし、帰ることも大事なの！」

「わがまま言わないでよ！ さつさと来なさいよ！」

「何か別の解決策を考えようよ！」

「うるさいわね、わかったわよ！」

突然ナツメから鋭い一撃を腹に食らった。完全に無防備だったハルキは、うめき声をあげながらうずくまった。

ナツメはハルキから鏡を奪い、逃げるように走り去った。

「ひ、酷い……」

余計に元の世界に帰りたくなった。

第7話：殺戮

ナツメに殴られ、しばらくピクピクと体を震わせ悶えていたハルキだったが、なんとか痛みが引いたところで立ち上がった。

鏡が奪われた。いくら村人のためとはいえ、勝手に持つていかれると困る。元の世界に帰れなくなるかもしれないから、早くなんとかしないといけない。

鏡を取り戻すため、ハルキはナツメを追いかけた。必死に走った。一生懸命搜した。

しかしすぐに足を止めた。いや、止めざるを得なかった。

目の前に別のリザードマンが現れたのだ。

すぐさま回れ右。ハルキは来た道を逆走した。

当然リザードマンは追ってくる。奴の足は地味に速い。運動神経があまり良くない非体育会系のハルキは距離を詰められつつあった。このままだと追い付かれるのも時間の問題。

——戦うしかないのか？ でもこんなステンレス製の剣だけで勝てるのだろうか。

いや、それ以前に自分には戦う気がない。やはり魔物は危ないから、こんな化け物は怖いから。

ハルキは昔から勇気というものがいまいち足りてなかった。カマキリを触るのにもいちいちビクビクと怯えるし、ムカデや芋虫といった類いの虫を見るだけで後退りをした。とにかく一度怖いと思ったものには近付きたくないのだ。あと極端に虫嫌いなのだった。

ということで、引き続き逃げることにした。だが、さっきも述べたようにハルキは非体育会系なわけで、もちろん体力のほうも非常に少なかった。つまり、既に疲れていた。こんなことならマラソンの授業ぐらいは真面目にやっておくべきだったと後悔した。

残された道は、やはり抵抗しかなかった。

ハルキは剣を構えた。震えているのがわかる。怖いから震えてい

るんだ。たしかナツメに

「素人の構え」と言われたのを覚えていた。当たり前だ、自分は一般人なんだから。

リザードマンの持つ剣を見ただけですくみそうだ。しかし必死に気を持って耐える。

「うわああッ！」

ハルキは叫びながら斬りかかった。しかし簡単に受け止められ、ハルキの剣は弾き飛ばされて地面に突き刺さった。

ハルキは飛ばされた剣に意識を持っていかれ、目の前のリザードマンに対しての注意を欠いた。ハルキは完全に隙だらけだった。すかさずリザードマンは剣を振り上げた。

——ハルキが気付いた時には、剣がギロチンのように勢いよく振り下ろされていた。

「ハゲた村長さんよ、なかなか良い筋をしてるけど、やっぱり俺には敵わないようだな」

ソンチヨは体のあちこちから血を流し跪いていた。一度咳き込むと、口から血を吐き出した。

「リザードマンの大群は既に村中に散らばってんだろうな。何人の村人が殺されたかな」

「貴様……すぐにやめさせろ！」

「だから、精霊の鏡を持つてくれれば済む話なんだって。そうすりゃこんなことしないでやったのに、いちいち楯突くからいけないんだよ」

ハデーンはソンチヨの顔を容赦なく蹴飛ばした。ソンチヨは再び吐血した。

「お前の息子はリザードマン達をなんとかしに行つたみたいだが、正直言つて一人だと逆に殺されるぜ？ 娘のほうはどこに行つたんだか知らねえけど。まあ、父親の不様な姿を見なくて済んでよかったかもしれないな」

倒れるソンチヨの首元に、長剣の刃を押し当てた。

「逝くか？」

「くっ……！」

瞬間、ハデーンの横を炎の玉が通り過ぎた。

ハデーンは何事かと思い炎の玉が飛んできた方向を見ると、息を荒げたナツメが立っていた。

「お父さんを……離さない！」

「ふっ、いいのか？ そんなことしたら余計に殺したくなるんだが」

「あんたこそ、鏡が壊されてもいいって言うの？」

「……なに？」

ナツメはハルキから取り上げた鏡を見せつけた。

「これが精霊の鏡とやらよ！」

「本当かよ、嘘臭えな」

「とにかく、お父さんや村の人達に手を出すのはもうやめて！ この村から退いてくれるなら、この鏡をあげるから！」

「なるほど、交換条件か」

ハデーンはしばらく考えた。その間にナツメはソンチヨの体に応急処置を施した。

「お父さん、大丈夫？」

「ああ、すまない……。だがナツメ、あのダークエルフに鏡を渡し
てはいけない」

「どうしてよ！ このままだとみんなあいつに殺されちゃうでしょ
！ この鏡でみんなが助かるのよ！」

「こんな酷いことをするあいつだ、きつと鏡を使って良からぬこと
をしようと企んでいるに違いない。そんな奴に鏡を渡すことはない」
「でも……ッ！」

ハデーンは結論を出した。鏡を渡せ、と。ただしこの鏡が精霊の
鏡ではなかった場合、皆殺しにするためまた来てやる、と。

ナツメは鏡を渡そうとしたが、ソンチヨがナツメを引き止めて首
を横に振った。

「悪いが貴様のような輩にそれは渡せん。貴様にはここで朽ちてもらおうか」

「真っ直ぐな正義なのか、それとも鏡が偽物だったのか……。どっちにしろ今の一言でお前らの死は確定した。殺して奪えばいいだけだ」

ハデーンは長剣を握り締め、にやりと怪しく微笑んだ。

第8話：覚醒

ハルキは真つ暗な空間にいた、ような気がした。意識が朦朧としているため、状況がはつきりと理解できない。

自分は立っているのか、座っているのか、浮いているのか。その感覚がない。

何故自分はこんな所にいるのか。朧気な記憶を掴もうと、頭の中で必死にもがく。しかし煙に手を突っ込むように何も思い出せなかった。

『——キ、……ルキ』

どこからともなく女性の声が聞こえた。

『ハ……キ……、ハルキ……』

母親が子供を寝かしつける時のような優しい声。その声を聞いていて、ハルキの心は少し落ち着いていた、ような気がした。

そして、少し記憶が蘇ってきた。

——ナツメに鏡を取られ、リザードマンに襲われ、剣で斬られ……。

「俺、まさか死んじやったのツ？」

誰に言うわけでもなく、大声で叫んだ。

『いいえ、貴方はまだ生きています』

さつきから聞こえる声が答えた。

『リザードマンに斬られる寸前のところで話しかけています』

「えっ、じゃあまだ生きてるわけ？」

『そうだと云ったばかりなんです』

「ところでここはどこなの？　そしてあんたは誰なの？　俺はどうなるの？　口笛はなんで遠くまで聞こえるの？」

ハルキは軽く混乱していた。非日常的な出来事ばかり起きて、頭が追いつかなかった。なにがなんだかさっぱりだった。

『順を追って説明する時間はありません。簡潔に述べますがよろし

いのですか？』

「うん、簡単に説明してくれるほうが俺としても助かる。色々わけがわからなくて、頭がおかしくなりそうなんだ」

『では一度しか言わないので、ちゃんと聞いて内容を理解してくださいね』

声の主は咳払いをした。

『ここは“貴方の意識の中”です。私は貴方の意識に直接語りかけています』

「ど、どという原理でそんなことができるんだよ」

『教えたところで貴方には理解不能です。黙って話を聞いてください』

何故か怒られ、ハルキは少しだけ傷付いた。

『私はこの世界の精霊。名前は……まあ、今はいいでしょう。私は貴方を待っていた。——いや、待っていたのは私だけではありません。……詳しくは時間がないので言えませんが、貴方はこの世界——シキに來る運命だったのです、偶然ではなく必然的にね。貴方には秘められた力があります。それは、この世界の英雄の力です。その英雄の話も長くなるので今はできませんが、要は昔々のシキを脅かしていた悪をなんとかした英雄だと理解してください。そしてその悪の手下が今、この村に來ています。手下の名前はハデーン……金色の鎧を身に付けたダークエルフです。今奴をなんとかするには、貴方に秘められた力を目覚めさせるしかありません。……ということで、貴方を強くするのでハデーンをなんとかしてください。わかりましたか？』

「ノー」

ハルキは胸を張って即答。

——自分が英雄の力を持っているだって？ どの三流シナリオだそりゃ。

当然信じられるわけがなかった。

『……貴方は戦わなくてはなりません。この三流シナリオに沿って

動かなくてはならないのです。これは既に決まっていることなのです」

「そんなこと知らないよ！　ここが本当に異世界だって言うなら、俺は元の世界に帰らなきゃいけないんだ！　こんな所にいたくないんだ！」

『……貴方は今、リザードマンに斬られる寸前です。私の力でまだ生きていられるのです』

「だから何なの？」

『このまま先ほどの状況に戻すと、貴方はあつという間もなく奴に葬られますが……いいんですか？』

「え……」

それは半ば強制的だった。いや、脅しだ。今先ほどの状況に戻れば自分は死ぬ。死にたくなければ力を得ろ、と。

たしかに死んだら元もこうもない。しかし力を得れば“戦い”という辛いものに駆り出される。

もちろん死ぬのは嫌だ。また帰って孤児達と仲良く暮らしたいのだ。平和な世界にいたいのだ。

帰るためには力を手にしなくては――

ハルキは、躊躇いつつも戦うことを決意した。

『では、いきます』

突如として振り下ろされた刃。自分を一直線に狙う。しかしハルキにはそれがはつきりと、まるでスロー再生のように見えた。

不思議なことに、どう対処すればいいのかは身体が理解していた。素早く横に避け――足払いをかけ――相手が倒れたところで、顔面に剣を突き立てる。意識していないのに勝手に動いた。

リザードマンは顔から赤紫色の血を吹き出し、そのまま動かなくなった。

ハルキの手には、剣で刺した時の生々しい感触が残っていた。言葉では言い表せない、とても気持ちの悪い感触。自然と手が震えた。

その時、リザードマンから村人を守っているディランを見つけた。ディランは一人で二体のリザードマンを相手にしていた。加えて村人を守っているため、明らかに分が悪い。

——助けないと。

ハルキは手の震えを無理矢理抑え、自分に「大丈夫」と言い聞かせて駆け出した。

身体がとても軽かった。風のようにどこまでも飛んでいけそうだった。

ハルキは一頭のリザードマンの脇を駆け抜けた。刹那、リザードマンは体から血しぶきを噴き出し崩れ落ちた。

「は、ハルキ……なのか？」

ディランはハルキの並外れた動きを目の当たりにして驚いていた。それもその筈、今までハルキの情けない姿しか見ていないのだから当然だ。

ハルキはまた震えた。リザードマンを斬りつけた感触がいつまでも手に残る。

——気持ち悪い……。

「ハルキ、危ない！」

もう一頭のリザードマンがハルキを狙っていた。ハルキは震えて動こうとしない。

「くそっ……ハルキッ！」

ディランはハルキを助けるために駆け寄るが——間に合わない。

その時、ハルキが瞬時にリザードマンを見た。

無表情だった。

「寄るなよ」

ハルキは異様なまでの殺気を放っていた。それを痛いほど感じたリザードマンは、持っていた剣と盾を捨てて逃げ出した。

「ハルキ！」

ディランの呼びかけに、ハルキは振り向いた。

ディランはハルキの様子がおかしいことを気にかけたが、なんと

なく聞くことができなかった。

「デイルンさん、ハデーンって奴はどこにいる？」

「村の入り口辺りで父さんと戦っていると思う……って、お前ハデーンと知り合いなのか？」

「知らないよ」

ハルキは言われた所に向かって駆け出した……つもりが、デイルンに止められた。

「お前みたいな普通の人間が行っちゃいけない！ あいつは……ハデーンは雰囲気からして相当危険だ！ 死にたくないなら逃げてくれ！」

「そうはいかないんだよ」

ハルキはデイルンをどかした。

「なんか……運命らしいから、俺は戦わないといけないみたいなんだ」

「は？」

「怖いけど、これは運命なんだって。戦わないと帰れないんだって。震えているけど、やらなきゃいけないんだよ……」

「ハルキ、お前何を……」

「だから俺は帰るために戦う。こんな世界にいたくないんだ！」
ハルキは叫んだ。ハルキの声は、辺りに響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5005c/>

Shiki

2010年10月10日16時37分発行